



Title	大学の知を活かした環境保護、環境保護を活かした実践型教育：モンゴルでの取り組みを事例に
Author(s)	思, 沁夫
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55571
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2-3

大学の知を活かした環境保護、 環境保護を活かした実践型教育 モンゴルでの取り組みを事例に

思沁夫 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

はじめに

本報告では、研究・教育・実践活動に焦点を当ててグローバル共生を目指す、モンゴルでの取り組みについて紹介します。

大阪大学GLOCOLは、研究・教育・実践の一体化およびグローバル共生の具現化を重要な活動理念・方針に掲げ、学際的、分野・地域横断型の共同体制を構築、様々なプログラムを開発、推進してきました。

ここで言うグローバル共生とは、GLOCOLがおそらく日本で最も早期に提唱した概念であり、人間と自然との共生、さらに世界の人々が互いに理解しあう人間と人間との共生を意味します。自然との共生は、特に自然とのバランスの問題を意味しており、人間同士の共生とは互いに尊重し合い、協働関係を構築することを主に考えています。

この概念の特徴は、大きく2つあります。まず、グローバル化の進展に伴う社会、経済、ライフスタイル等の流動化という現象の下で、個人や様々な地域において適用可能性を持つほか、世界中の個体間、民族間、文化間の平等性を基本原則としながらも、多様な社会を積極的に評価することです。また、グローバル共生という概念は、人間社会や多文化共生を思想の中核に据えつつ、人間の安全保障や文理融合、分野横断的、研究教育の実践の一体化などの方法論と内的なつながりを持っています。

GLOCOLは2007年の設立以降、地域住民や実践者、研究者との緊密な連携体制の下、人間の安全保障、グローバル化と移動・移住、多文化・多言語社会、災害と復興などを中心テーマに様々な課題に取り組んできました。私も上記テーマに関連し、新設科目の開発や運営、実施に携わってきました。

しかし世界、とりわけアジアの現状を俯瞰してみてください。アジアで

はグローバル共生どころか、様々な問題が浮上、山積し、あらゆる格差が蔓延しているのが事実ではないでしょうか。また、文理融合型や学際的、分野・地域横断型の協働体制が声高に唱えられ、推奨され続けている背景には、グローバル共生の実現の必要性という切実な意味が込められているとも考えています。

私たち人間は近代化を遂げ、モノに恵まれ、経済的には豊かになりましたが、市場化、個人化、無縁社会化が浸透し、人間同士や人間と自然の関係が本質的に分断されてしまったと言えます。モンゴルも例外ではありません。

確かに、グローバル共生をグローバルな社会現象として実際につくり上げることは容易ではありません。しかし、私としては大学の知を活かし、モンゴル現地から学びつつも、協働する意味を現地とともに共有できれば、グローバル共生の実現はそう遠くないと考えています。私はグローバル共生の理論的研究ではなく、社会における実践として捉えています。単なる資金や技術の投入という支援ではなく、地域研究者として、地域および住民レベルでグローバル共生的な関係を構築したいと考えています。

1. モンゴルでの環境保護活動のはじまり

モンゴルは1990年代初頭の民主化以降、政治、経済、社会、文化などのあらゆる面で大きな変容を遂げてきました。2011年にはGDP成長率が17.3%に達して世界一を記録するなど、著しい経済成長と開発を遂げていますが、その陰で環境破壊、とりわけ鉱山開発が進行しています。地表水および地下水の枯渇や乾燥化が深刻化、自然および人々の健康被害が発生し、生活基盤が蝕まれ、遊牧生活の維持や伝統文化の継承が懸念されています。またモンゴルは社会主義国家としての負の遺産を抱えつつ資本主義体制に急速に移行しました。地球温暖化やゾド(自然災害)に対する人的、制度的、技術的側面の欠如は、モンゴル社会および国家基盤の衰退に拍車をかけています。

2007年夏、日本で出会ったモンゴル人留学生(バヤサさん)の案内のもと、私は彼女の故郷であるモンゴルのウブスハンガイ県を訪れたことがあります。この県を大きくまたいでオンギー川が流れていましたが、川流域で鉱山開発による環境破壊が進行していました。その現状を実際に目の当たりにし、私は大きな衝撃を受けました。遊牧生活を送る現地の人々にとって、人間と自然環境との共生がなければ、それは生存基盤の崩壊

と死を意味するからです。これは幼少時代に遊牧生活を送った私自身の経験からも言えることです。この衝撃が現地で環境保護活動に着手する大きなきっかけとなりました。

ここでモンゴルの環境について、オンギー川も含めて補足説明します。モンゴルの水系の約7割以上がセレンゲ川(モンゴルとロシアを流れる全長約920kmの主要な川)とその流域によって構成され、川は北部に向かって流れています。セレンゲ川はモンゴルの北中部のハンガイ山脈に水源があり、そのうちゴビ地域に到達する川は3本あります。オンギー川はそのひとつです。オンギー川は全長約437 km、モンゴルの生態、地理、歴史、文化的に重要な川のひとつで、約1万2千人の遊牧民や地元住民と約100万頭の家畜の貴重な水源として利用されています(これは2009年のデータに基づいています)。しかし、オンギー川は1997年頃から断流し始め、ウランノール(湖)は遂に枯渇してしまいました。オンギー川の断流にはさまざまな要因が考えられていますが、最大の原因と言われているのが砂金採掘を目的とした鉱山開発です。当地域の人々の遊牧生活はオンギー川を中心とする自然環境の循環によって成立しています。つまり、川の断流は遊牧民および家畜の生存状況に多大な影響を及ぼしているのです。

2008年、私はオンギー川流域においてまずは現地の人々との交流を行い、オンギー川保護会の一員となり、またツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合(組合長はネルグイ氏)との信頼関係を構築したのちに環境保護活動を始めました。地域住民らと連携し、オンギー川の水源地の鉱山開発阻止、河川流域の3県8ソム(郡)の11年制学校における環境教育用教材の開発・導入、水をテーマとした絵画や作文コンクールの開催、川流域における7カ所でさじ(莎莉)、柳、モンゴル松などの植林活動を開始しました。なお現在は主にオンギー川保護会のメンバーがこれらの活動を継承していますが、植林地域のうち5ヶ所では植物は順調に生長しています。

2. ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合における活動

オンギー川流域の環境保護を振り返れば、特にツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合との関係が最も良好なたちで維持されていると言えます。その活動は主に以下の3つの段階を踏むかたちで実施、継続されています。以下、ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合における活動内容を中心に報告したいと思います。

①啓蒙と信頼関係の構築、維持

まずは地域遊牧民が土地を提供します。そこで、オンギー川流域に生息する地域固有種、白い柳林の保護区域を設置し、現地のツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合が管理し始めたのです。保護区域は木柵と鉄線で取り囲み、家畜の自由な侵入を防ぐことで白い柳の苗管理と生育を促進させることに成功しました(写真1を参照)。



写真1 保護区域における柵の設置作業と設置後(現地協力者提供)

当該地域の生態系は着実に回復し、2002年はわずか57本(生長中の白い柳のみ)でしたが、2015年時点で5km範囲にまで拡大しました。また、牧草の余剰分を家畜の越冬用飼料として保存可能となり、遊牧民の生活維持と負担軽減、家畜の生存につながりました。これらの成果が確認されたことで、地元ではさらなる信頼・協力関係が醸成されていると言えます。

②問題解決に向けた協働の取り組み

2014年以降、公益財団法人アソシア・オセアニア財団の環境研究助成の支援を得て当地全域における保護活動を推進しています。

助成金申請を決意した理由は主に2つあります。まず、当財団は「アジア・オセアニア諸国における水や緑をテーマとした自然環境の保護及び整備等のプロジェクト並びにこれらの活動を行う者に対する支援」を積極的

に推進しています¹。次に、ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合のネルグイ組合長を含め、現地より資金不足が要因で柵の設置や苗植え、人材確保が困難であり、環境保護の基本的な活動に至っていないという報告を受けていたからです。

企画プロジェクトは採択され、現在に至るまで環境保護のための経済的支援を受けています。モンゴル現地では環境保護に不可欠な材料(木柵や鉄線、白い柳の苗木など)を購入し、また保護区域における人材が確保されたことで、白い柳保護区域は順調に拡大しています。

また、2015年時点で保護区域から10km地点で白い柳の芽が観察されましたし、地元の遊牧民にサイレージ技術等の研修を行い、飼料の自己利用だけでなく販売が可能となり、経済的に生活が潤うようになったことも重要な成果のひとつです。さじやブルーベリーの生産および販売による生活維持への発展にも貢献したと言えます。さらに、当地の歴史文化遺産(写真2を参照)、希少動植物(写真3、4を参照)の発見と保護を推進、「地元の再発見、再解釈」を図ってきました。これらの活動をさらに展開することで地域全体の環境保護活動と観光化の促進が期待されます。

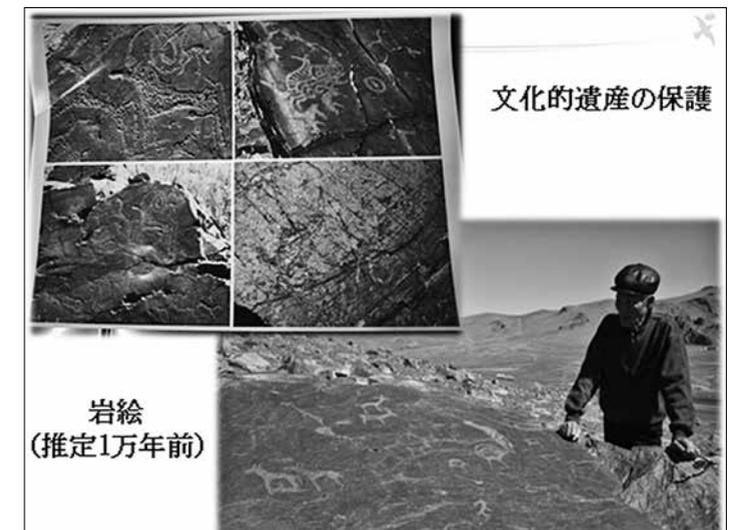


写真2 歴史的文化的遺産である岩絵(右下はネルグイ氏)

1 詳しくは<http://www.resona-ao.or.jp/project/environment.html>を参照。

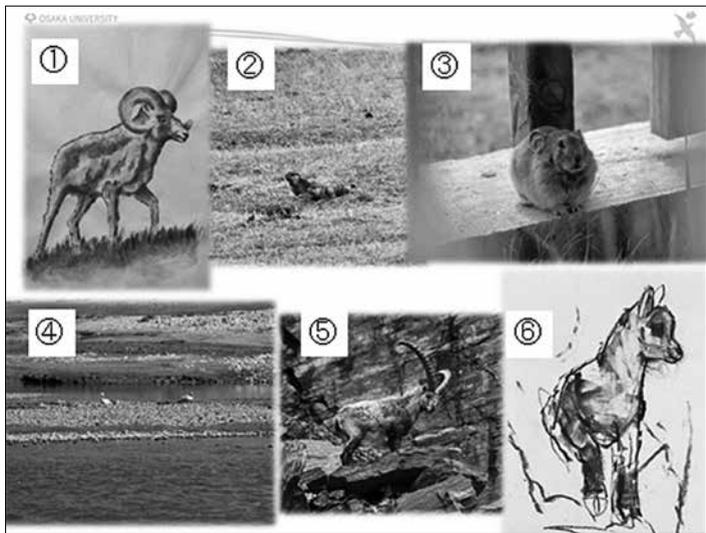


写真3 ①アルガリ(Ovis ammon) ②タルバガン(モンゴリアン・モルモット) ③ナキウサギ ④渡り鳥(ガン) ⑤アイベックス(Ibex) ⑥アイベックスの子ども



写真4 ①さじ(保護区域のさじ園で撮影。2015年はさじ35kgが収穫されました。世界的にもビタミンCが豊富な植物であり、健康飲料や食品としての価値が高いです。) ②白い柳の芽と報告者(2015年8月14日ツァガンボルガソ環境保護組合から約5km地点) ③サルラン(モンゴルの代表的な花) ④ヤルガイ(モンゴルの代表的な花)

③現地の自立とグローバル共生のモデル構築

活動の主体は支援者側ではなく、地域自身にあると考えています。モンゴルにおける活動の最終到達点を、地域の遊牧民らをはじめ地元住民が主体となり、支援者は補助的に現地と関わることで、地域のローカルナレッジとともにグローバルな視点を融合させ、協働する意義を考えることだと考えています。

私はモンゴル・フィールドスタディ(2012年～、写真5を参照)、日蒙青少年交流活動(2015年、写真6を参照)を展開してきました。



写真5 ①地域の最大寺院の1つガンダン寺院復活に貢献した高僧による講義(2012年) ②オンギー川上流域の鉱山開発現場(2013年) ③地域の子供たちおよび阪大生がオンギー川周辺でゴミ拾い(2013年) ④半遊牧民・半ニンジャのゲルにてインタビュー(2015年)

なお、モンゴル・フィールドスタディとは、モンゴルにおける「開発と生存環境」をテーマにGLOCOL、モンゴル国立大学、モンゴル科学技術大学、ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合が共同で企画・実施する海外体験型学習のことです。

具体的には以下のようなプログラム内容を用意しています。大阪大学の参加学生たち(院生が主な対象)は、ツァガンボルガソ環境保護組合が提供する宿泊施設を拠点に約1週間滞在し、遊牧地域や鉱山開発の現場を訪れ、人々の生存と環境との相互関係、そこで生まれるいくつかの危機



写真6 環境保護地域における日蒙間の青少年交流活動の様子

的状況を体感的に学びます。また、ネルグイ組合長、遊牧民のご家庭、ニンジャ（個人の砂金採掘者）、チベット仏教高僧などに対する聞き取り調査を行い、現地の社会的・文化的文脈を出来る限り深く理解するように努めます。最後に交流先大学で調査成果報告会・ワークショップを実施し、現地学生とのディスカッションを行います。そこで日本側の参加者は調査で得られた知見を地元社会に還元します（2013年度のフィールドスタディの成果はモンゴル語訳され出版されています）。参加者全員がモンゴルが直面する課題の問題意識の共有や相互理解、議論を交わすと同時に、それが参加者自身とグローバルな課題であるという認識を得て、考察を深めます。

以上のプログラム内容を遂行、継続する中で、日蒙間で相互学習環境が構築され、好循環が生まれてきたのは重要です。2012年以降、日本からはほぼ毎年、阪大生たちが環境保護区域を拠点に滞在、調査活動を行い、また2015年はりそなアジア・オセアニア財団より理事長や専務理事も環境保護活動を視察されたほか、大阪の小中学生が地元の小学校を訪れました。頻りに日本人が訪れ、現地との交流を密に重ねてゆくなかで、現地モンゴルの遊牧民や住民たちは、少しずつ地域の良さに気づき始めたのです。遠い日本から、はるばるやって来て、日本からの参加者はモンゴルにある素晴らしいものを次々に発見します。現地にあるもの、価値あ

るものを発見し、それを地域の人々に伝えることで、現地の人々が当たり前だと認識していた地域を「再発見」したのです。この「再発見」が大きなきっかけとなり、地域の環境や歴史文化的遺産の保護活動を促進させる原動力と現地の人々の自信につながったと言えます。

モンゴルの遊牧や自然、歴史、人々の生活などをはじめとして、モンゴルに関心を抱く人々が多いと感じています。モンゴル・フィールドスタディは環境保護、教育、研究が一体化し、参加学生によって問題解決の鍵が提供され、地域住民と協働で取り組む可能性を秘めていることを企画・担当教員として十分に感じ取ってきました。今後も学生たちの真摯な眼差しに答え続け、単なるプロジェクト遂行ではなく、現地との懸け橋となるよう確実に実践を継続してゆきたいです。

また、現地では環境教育も展開してきたことは既に述べました。私はウブルハンガイ県におけるソム(郡)の5つの学校と1つの幼稚園で環境保護の授業を担当しました。そこでは「水」を題材にした絵画と作文のコンクールを実施しましたが、延べ100名の生徒が絵や作文を寄せてくれました。このコンクールは日蒙間の幼稚園児たちの絵画を通じた交流に発展しました。子どもたちが思い描く「水」の姿を絵にのせて、相手を知り、違いを認識し、また価値観を共有することができたと思います。絵画コンクールから日蒙間の新しいかたちの交流が生まれたことは重要であり、今後も続けていきたいと考えています。

「木があれば水がある。水があれば草がある。草があれば遊牧民が生きられる」これはモンゴルの共生の哲学です。しかし、この自然哲学と相反するモンゴルの環境破壊という現実から判断すれば、モンゴルは依然として共生から程遠い状態にあると言わざるを得ません。そこでこれからは自然を軸に共生を捉えるよりも、人間の視点を加え、自然を考えてゆくことがより重要ではないかと考えています。今後はモンゴルにおける現在までの活動実績を踏まえ、問題意識と思考の多様性、主体的な組織化という2つの観点を最重要課題に定め、新たな活動を織り交ぜて活動展開してゆきたいです。

3. アジアの課題はローカルでグローバル

最後に、セミナー1の全体テーマ「アジアの課題と大学の知」について述べさせていただきます。

私はアジアの課題はローカルであり、同時にグローバルでもありと考えています。つまり、アジアの課題は人類共通であり、普遍性があると言え

ます。

その課題とは、まず人口増加です。特に20世紀以降、私たちは人口爆発の時代を迎えました。世界人口は2050年で97億～108億人に達するのではないかと推測されています²。世界人口の約60%がアジアに集中しています。人口密度は1キロ平方メートル当たり89人と高いです。ある意味で、アジアは人口爆発の課題の中核部を担っているといえます。現在の私たちの生活は生態系に依存して成り立っていますから、莫大な人口を支えつつも、生態系を維持しなければ、人類の生命と健康が脅かされることとなります。

次に環境問題です。地球そのものには、有限性があります。この事実は、約46億年前の誕生以来、変わりません。しかし事実を私たち人間が「自覚」し始めたのは、ここ近年になってからではないでしょうか。科学技術の進展と世界人口の急速な増加に呼応するかのように、様々な環境問題が拡大しています。

さらに、大量生産/流通/消費型の近代社会構造が全地球規模で、浸透しつつあることが環境問題の悪化に拍車をかけ、事態の改善・解決をますます難しくさせています。アジア諸国は世界で最も高い経済成長を遂げる一方、人間は食・健康・環境の基盤を失っています。本来は生態系が豊かで多様であったはずのアジアが、現在、地球の生態条件と環境容量をはるかに超えた資源を世界中から輸入しています。環境負荷が非常に高い一方で、内部人口の維持のためさらに多大な圧力を抱えているのです。

中国を例に挙げましょう。世界自然基金(以下、WWFと略します)は中国の環境・発展国際協力委員会(CCICED)と共同で2015年11月13日「地球生命力報告書 2015 China」を発行し、生物多様性と自然資源の最新状況について報告しています。本報告書のなかでは1970年～2010年の40年間で中国の陸生、脊椎動物は半分以上に減少したこと、中国のエコロジカル・フットプリントは倍以上に拡大し地球全体の6分の1を占めて世界第一位となったこと、中国は環境負荷の2.2倍の資源を消費するようになっており、中国のほぼ全域で「生態赤字」が急速に拡大し、森林減少、干ばつ、水不足、土壌流出汚染、生物多様性の喪失、大気汚染などの様々な問題に直面するようになっていくことが説明されています³。

アジアの経済産業は世界を支えています。アジアと聞けば、貧困に見

舞われた「発展途上国」「被援助国」のイメージ(日本や韓国など一部の国を除く)が強いかもしれませんが。かつてはそれが事実でもありました。しかし、アジア各国とG7やいわゆる「先進国」と称される国と比較すれば、確かに経済的格差があります。しかし、アジア市場や人材、資源が「先進国」の経済成長・発展に貢献していることは明らかです。アジアは今や世界経済のセンターに位置づけられています。アジア経済の低迷や崩壊が世界経済システムに直接的に影響を及ぼす可能性も十分にあるでしょう。アジアの人材はグローバル化しています。この人材が人類共通の課題の解決にいかんにか貢献できるでしょうか。グローバルネットワークをいかに取り込むことができるでしょうか。地域で有効なアプローチを構築するとともに、地球規模で考える必要があります。

大学には、問題解決に全うする人材、リーダーを育成し、アジアの知を向上させ、教育刷新を目指してゆく姿勢が求められます。日本という国や専門性を重視し、具体的かつ丁寧に考え、主張することは確かに素晴らしいのですが、やはり現代の教育には、地球規模、あるいはアジア全体を視野に入れた教育も求められているのではないのでしょうか。世界的にも重要な位置を占める大学においてはその意味が特に理解されやすいと思われる。

これを東アジアの具体例から考えると分かりやすいかもしれません。東アジアの中でも日本は急速に人口減少社会に転じています。日本は人口減少、あるいは少子高齢化を問題としてマイナスで捉えています。この発想は産業経済主義が転じたものであり、グローバルな視点に欠けていると言えます。日本では教養の高い人口が多く、生活環境の水準も世界的に見てトップレベルに位置づけられています。人口減少社会のなかにおいても、人々が精神的に豊かで、また快適に暮らしてゆけるような環境づくりが構築できれば、日本人だけではなく人類にとって重要なモデルとなるに違いありません。人口減少に転じる(あるいは転じると予測される)他の国・地域の思想に大きな影響を与えるでしょう。また、世界でも最も人口密度の低いアジアの国、モンゴルは1平方キロメートル当たり1.87人ですが、アジアで第4番目に広い(世界で18番目)国土面積を有しています。モンゴルには人間の影響がまだ限定的である地域が多いです。それは生物や生態環境という観点からも重要な地域でありますし、国全体に遊牧文化が普及しているという独自性もあります。このモンゴルという国が近代的産業を発展させつつも伝統的文化を維持するような、少数民族や原住民にとってのモデルが構築できるのでしょうか。ひとつの重要な可能性を秘めているのではないのでしょうか。

2 The World Population Prospects, the 2015 Revision <http://esa.un.org/unpd/wpp/Download/Standard/Population/>

3 本報告に関しては、自然の友の環境静態経済12月号(電子版)より引用。

私たちが目指すのは、学問の確立だけではありません。社会実践の推進だけでもありません。学問と実践の両方を目指しています。しかし、学問的な価値が見出されれば、(確かに学問としての意味は認められましたが、)実践の即効性につながる場合もあれば、多大な時間と労力を要する場合もあります。

今後、国や地域という枠組みを超越し、大学も人類の重要な課題に挑戦し続ける必要があります。そこで私たちの挑戦が理論的展開に収束してはなりません。国や地域との関係性の構築が大きな一歩であり、重要ではあるのですが、その実現は一枚岩ではいきません。アジアは一言に言い切れないほど、多種多様で、複雑な政治的、経済的、歴史的、イデオロギー的な問題を抱え続けています。また、アジアの環境問題は政治問題、はたや経済問題だとも言えます。問題が複雑多様化、重層化しているため、問題自体を純粋に抽出するなど不可能に近いです。

その意味において、アジアの課題は私たちに大きな問いを差し続けていると思われる。地域とのつながりを構築、維持しつつ、研究・教育・実践を三位一体化させ、アジアの知の進路をいかに深く考えられるのでしょうか。新たなアプローチの構築が何を生み出すのでしょうか。そして、私たちが確かな方向性を掴んだとき、研究・教育・実践に一体何が求めているのかが問われることになるでしょう。

おわりに——セミナー報告を終えて

今回のセミナー報告を終え、モンゴルでの取り組みがなぜ実現できたのか振り返って見たところ、GLOCOLの基本理念や方針に加え、大学における知識、情報、システムが充実しており、共有可能だったことに辿りつきました。

GLOCOLには国際協力や支援、学内部局のGLOCOL兼任教員との共同研究などを通じて情報が豊富にあり、相互に情報交換と更新を行ってきました。

GLOCOL着任当初、初代センター長の小泉潤二先生が研究代表を務める「人間の安全保障とサステイナビリティ」の公募プロジェクトに参加しました。そこで、大阪大学環境イノベーションデザインセンター(CIEDS)の上須道徳先生、原圭史郎先生、工学部・工学研究科所属の池道彦先生、梅田靖先生らと共同でワークショップを開催したことがあります。先生方との交流と議論の中で環境分野における文理融合、少しずつ学際的アプローチを理解してきました。人間の安全保障という概念は、サステイナビ

リティと密接に関係しています。学際的研究にはじまり、自身が担当した多文化共生社会の研究を経由して、自然そして人間との共生を分離せず、大局的に共生として捉え、アプローチする構想が生まれました。その成果は、様々なかたちで共同研究や実践に活かされています。

GLOCOLのOBである峯陽一先生、草郷孝好先生、上田晶子先生、ヴァージル・ホーキンス先生たちのご協力の下、私はJICAとの連携協力関係を構築し、組織からノウハウを学ぶこともできました。私の場合、まずはJICA大阪(当時)の協力の下、現地調査と支援に取り組み始めましたが、協力関係を構築、維持する中で国際NGOや国内NPOの知識やノウハウも活用できました。しかし、獲得した知識、習得したノウハウは、モンゴル地域研究者との緊密な連携があつてこそ、はじめて現地の緊急性、深刻さを帯びた問題の解決に向けて、知識とノウハウに加えて知恵も導入できたと言えます。また、日本のNPOや民間、地域とのつながりとノウハウの蓄積は、石井正子先生や吉富志津代先生によるところが大きく、2008年の四川大地震以降、中国・雲南省におけるNPO団体と連携し、地域の様々な活動に取り組んできました。

最後に、私自身が体験し、大切にしている「日本の研究アプローチ—地域との付き合い方」について述べさせて頂きたいと思います。私はGLOCOLの本庄かおり先生を通じて医学系研究科・磯博康先生の秋田県井川町における循環器疾患の疫学調査に携わる機会を得ました。研究成果は2013年に日本公衆衛生学会や北京大学において「井川町という方法論：地域密着型疫学研究と地域一体型取り組みについて」という題目で報告しました。この発表で特に強調したかったこと、それは地域とのつながりと交流が紡ぎ出す「長期性」と「継続性」の大切さでした。当時は磯先生の前の前の代から引き継がれてきた研究活動50周年の節目の年でもありましたから、地域住民と研究者が一丸となって地域の課題解決に汗を流した過去の蓄積から、地域との信頼関係のもとで長期的に研究を継続する重要性を学ぶことができました。日本の公衆衛生学分野で交流と信頼による研究方法が構築、継承されていることから、「長期性」という視点(戦略性)⁴は非常に重要な研究方法であることを再認識させられました。

そもそも、「長期性」という研究手法に最初に出会ったのは、金沢大学大学院で今西錦司先生の人類学的研究を学んだときでした。今西錦司先生は、日本霊長類研究の創始者であり、霊長類研究の位置づけを構築し

4 詳細は以下の文献を参考。
中村美知夫『サル学の系譜』中公叢書、2015年

た方です。生物の進化、競争という原理に限らず、共生と生物の社会性について述べ、生態理論を独自に展開し、霊長類研究の研究手法の開発も行いました。私の言う「長期性」とは彼の研究手法のことです。

私は今西先生の作品『生物の世界ほか』(中央公論新社、2002年)と『人間以前の社会』(岩波新書、1951年)を読みました。調査地域との緊密な信頼関係を構築、維持しつつ、長期間にわたる霊長類の研究蓄積から得られた細部に渡る記述と分析スタイルは人類学的手法に通じています。サルを長期的に継続して彼らを観察したからこそ、サルの社会的行動、つまり複数の大人サルたちが病気の子どもザルを世話することなどの発見につながったのです。実は非常に彼の独自の手法と彼に続く日本人研究者の努力がサルやチンパンジーを中心とする霊長類の生態、社会、文化の解明に貢献しています。2015年、京都大学人類進化論研究室はタンザニアのマハレ山塊国立公園における野生のチンパンジー研究が50周年を迎えています。

なぜ「長期性」が日本的なのかということですが、まず日本と西洋では、研究する者と研究される「対象」との関係性、さらに研究者間関係性が異なるからだと思います。加えて、日本では実験用の動物に対しても「法要」が行われ、生命の尊さに敬意を払う文化がありますし、先輩/後輩関係や組織における責任など、継続性を維持しやすい習慣(「風土」)があることも挙げられます。

しかし、現在の日本では成果主義が蔓延しているように思われます。成果主義社会では短期間で出来る限り多くの成果が求められますので、即戦力のある人材が重宝されますが、人間の能力と言うのはそう簡単に身につくものではありません。長期的に諦めないで試行錯誤を繰り返すうちに、少しずつ培われてゆくものです。即戦力を抜き出して問うことになれば、これは日本が培ってきた「風土」や文化と相反するようと考えられます。また、グローバル化やパソコンとインターネットの普及などによって人々の出会いや交流の場、機会は急速に拡大し、コミュニケーションの手段も多様化しています。その一方で社会の無縁化が進み、人間や地域社会との関係が希薄化しているような印象を受けます。

日本では、地域研究という、長期間に渡る研究で、短期間で成果が得られにくい研究分野は規模が縮小しているように思いますので、特に危機感を抱いています。日本で学び、教育研究に携わるひとりの人間として、日本的な研究手法を大切に、幅広く、多様に実践してゆきたい。このように強く思います。